



TITLE:

<批評・紹介>竺沙雅章著 中國佛教  
社會史研究

AUTHOR(S):

金井, 徳幸

---

CITATION:

金井, 徳幸. <批評・紹介>竺沙雅章著 中國佛教社會史研究. 東洋史研究  
1983, 41(4): 762-769

ISSUE DATE:

1983-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153878>

RIGHT:

# 批評・紹介

竺沙 雅章著

## 中國佛教社會史研究

金井 徳幸

本書の著者竺沙雅章氏は、周知のごとく宋代史について、多くの論文を發表され、その業績は、特に佛教に限られないけれども、今回氏は、二十數か年にわたり各學術誌に發表してこられた中國佛教史關係の論文を五八〇頁餘の本書にまとめられた。内容は、前編・後編に分けられ、それぞれ正文・參考論文に大別される。各論文は、全體的にそれぞれ關連を保ち、宋代の佛教社會史としてのまとまりをもっている。前編では、宗教とくに佛教教團と社會との關係が論ぜられ、中國宋代社會史に占める佛教の地位と役割を明らかにされたのである。なお、參考論文は、地域的には敦煌に限定されるが、宋代の佛教史理解の有力な支えとなる論考で、正編もさることながら、それ以上に充實した精緻な諸論文で構成されている。本書は、『宋代佛教社會史研究』と題して、京都大學に學位請求論文として提出された。

著者は、その序で、中國佛教社會經濟史研究の歩みをふりかえり、それを①草創期②興隆期③守成期に分けられた。特に③の守成

期である戦後は、その研究はむしろ退潮の傾向にあり、中國史研究者からの佛教社會史への積極的な参加がみられず、佛教史を専攻するものが、歴史學の潮流から遠ざかってしまい、佛教社會史の側から、一般史を啓發する氣概を喪失した、と述べられた。その中で發展した部分として敦煌文獻の研究をあげられているが、著者は正にその發展に寄與した一人であったといえよう。後篇に掲載される一連の敦煌佛教史に關する論文がそのことを如實に示している。可能な限りの資料を驅使し、整然とした論證によって、新しい史實が掘り起された部分が多い。

さて、本書を貫ぬいている著者の基本的見通しと研究の意義について、まず序文によって知ることができよう。すなわち宋代は、佛教の衰退した時代ではなく、中國化した禪宗と淨土教が盛行し、佛教は、庶民の間にも、都市・農村の區別なく浸透しており、士大夫官僚も葬送には、僧尼による法會を營まざるを得ない程で、佛教と政治・社會との關係が極めて濃厚であつたとする。宋代史の側からみて佛教の存在は無視できないのに、從來このことは、佛教史・社會史の雙方に明確に認識されておらなかったとし、その缺を補うことを目指した、とされる。なお著者の基本的見解として、宋朝の宗教政策を通して、この時代の佛教に近世的特質をみられていることが特に指摘できよう。

以下各章の内容を紹介する。まず章別構成を目次に従つて示すと、本書は次のようになる。

### 序言

#### 前編 宋代佛教史研究

#### 第一章 宋代實態考

第二章 寺觀の賜額について

第三章 宋代墳寺考

第四章 福建の寺院と社會

第五章 喫菜事處について

第六章 方臘の亂と喫菜事處

第七章 浙西の道民について

第八章 元朝の江南支配と白雲宗

後編 敦煌佛教教團の研究

第一章 敦煌の僧官制度

第二章 敦煌の寺戶について

第三章 敦煌出土「社」文書の研究

あとがき

索引

第一章では、先ず賣牒の由來について、その起源を唐に求める舊説に對して、唐代に行われたのは、進納度僧であつて、空名度牒の出賣ではなく、賣牒の起源は、宋初の度牒密賣に求められることを論證される。ここでは、王安石ら新法派によつて推進されたという賣牒開始の事情を明らかにされる。このことについては、宋代以後、至徳二年の施策をもつて賣牒の始まりとする説が行われ、現代まで及んでいるが、志磐もまた荷澤神會傳に基づいて「賣牒此に始まる」としているが、これは妄斷であると斷ぜられている。至徳二年の政策は、納錢度僧であり、齋度であつて、空名度牒の賣賣でなかつたとする。

さらに納錢度僧から賣牒の經過を、各地の節度使や地方の權力者の施策からあつづけ、出家・剃度・剃髮つまり出家と得度が一緒に

なつて、童行・行者の段階をふまないで僧になることができる實例をあげられていく。從來「熙寧以前に度僧あるも齋僧なく、熙寧以後は齋僧あるも度僧なし」というような記事がみられ、模倣とした表現が多く、その實體が把握できなかったが、ここに著者の論考によつてはじめて度牒周邊の疑問點が氷解したのである。なお著者は、度牒發賣の年次は、熙寧年間に入る前年の治平四年（一〇六八）であつて、宋初以來度牒の密賣が行われていたこと、こうした度牒賣買の慣行に目をつけ、政府が公然と度牒を出賣し、北宋後期には地方財政の財源に充當するようになった實例を示しながら、上述の度牒發賣の過程を論證されていく。發賣開始の翌年である熙寧元年になると、かなり度牒發給が大量に行われたということからみると、王安石的對宗教政策の基本政策にかかわる問題があるようにみえる。すなわち廟を賣却することに對する舊法黨の反對・僧道免丁錢の賦課等をひくくするめて、考える必要があるように思える。なお從來の研究では、度牒をどのような方法で賣りさばいたかについての研究はなかつたが、この點について、商人の役割を明らかにされる。次に度牒價格を考證され、米價を算定してこれと並行して年代毎の價格を決定された。

次に高宗の度牒住賣策とその影響について論ぜられる。先ず南宋のはじめの度牒の發賣數や價格について検討される。高宗の賣牒停止について論及され、過去の廢佛策は效果なく、新たに僧道をつくらぬようにするのが有効であり、漸進的な現實政策を實施したことに對して明らかにされていく。この政策は、總領所設置による財政機構改革であつたが故に實行可能であつて、推進者は、秦檜であつたことを論證される。度牒發給停止の間に得度した者があつたか

どうかの検証は見事である。そしてこの措置の効果が、莫大な福建寺院財産の一部を没官する經濟上の效果に説き及んでいく。度牒の發給停止は、有髮未得度の宗教者を増大させ、既存教團に頼らない半僧半俗の宗教國・道民を現存僧道の二、三倍にしたとする指摘は、極めて注目すべきものといえよう。

さらに度牒一道の價格を算定され、各年代における公定價格や、その實際の價格についても明らかにして本章をしめくくられている。

第二章では特に仁宗晩年の嘉祐の賜額の内容についてのべられ、嘉祐以來連續して行われた大量の賜額は、熙寧三、四年で一段落し、このころ寺院數は、宋代最高になった事情について言及される。大量の賜額と賣牒とが同じ時期に行われたことは、大量の寺觀を公認して管理下に置いたので、賣牒という僧道の増加をもたらし政策を始めることを可能にしたとして、兩者の關係をはじめて明らかにされたのである。

ついで無名額寺觀に對する賜額は、南宋になると少なくなり、それに代つて廢寺の名額を移して、創建の寺院に掲げるといふ、新しい傾向が存在した事實について論證されていく。ここで創建に際して、他府州からも移額されるという興味ある事實も紹介される。著者は、またここで寺院の創建はおさえられたこと、廢絶の寺院が多かった事實をはじめて見出されたのである。そして後者の廢寺は、度牒發給停止とかかわるものとした。

次に賜額制度の意義について、多くの具體的な資料をもとに詳細に分析されている。特に賜額の最も重要な條件として、屋宇間數三十間以上ということをはじめて明らかにされた。賜額の詔が發せら

れて、州軍と下つて實際に各縣の縣尉によつてどう措置されたかなど、細部にわたり檢索されている。敕額が三十間という小菴院まで下賜されたのは、敕額の濫授でもなければ、誤つた寺院政策でもなく、僧尼における度牒に等しい役割をもつていたことを論證された。そして國家の統制があらゆる寺觀に及んだことを示すものとして、敕額の意義を明らかにされている。右の論考についてつけ加えられることは、寺院の主旨すなわち住持僧に對する國家管理が徹底していったことがあると思う。一般僧の遊行等の責任をも負わされたことが想起される。

第三章は、墳寺制が何故に宋代に限つて行われたのかについて論證されている。儒教を奉ずる當代の士大夫が擧げて墳墓の看守を寺院に委ねたのは、どうしてかについて今までどの論考も及んでいなかった。本章ではこれらを明らかにされる。先ず墳寺制の起源についてのべられ、さらに墳菴及び道教の墳寺に説き及び、墳寺墳菴普及の背景を明らかにしていく。先ず官僚が中央と地方を轉々とする浮草の生活であること(廻避の制の確立)。官仕して先祖の墓に詣でられぬ彼らは、墳墓の管理を郷居する族人に委ねたとする。この族人については、人の世の盛衰は豫想しがたい上に、毎日の生活に追いまぐられて、その家運は、元のままとは限らない。そこで僧寺の方が永續するのを目をつけて、墳墓の看守を僧寺に託して永存を願つたのであるとする。「北宋の士大夫の徙居と買田<sup>(4)</sup>」という著者の先の論考があつてはじめて新しい事實が明らかにされたのである。著者が僧寺永續を示す史料としてあげられた元の「金華黃先生文集」一三の淨勝院の記事について、附言してみたい。すなわち南宋では、「十方住持制」は、寺院の維持上、弊害が多くでてきて、

「甲乙住持制」の方が良いという考えが出てくる。<sup>(9)</sup>このようなことから、寺院も永續の點でまた問題なしとしない。本史料の中にでてくる「甲乙云々」というのも甲乙住持のことではあるまいか。

本章で著者は、宋代社會史の中で墳寺をはじめて正しく位置づけられ、その實態を明らかにされたのである。次に以上の墳寺とは逆の關係になる家廟制度にふれられ、唐宋の變化と合せて、明の墓莊にまで説き及ぶ。

第四章では、『淳熙三山志』を主な史料として、福建の寺院と社會の關係を明らかにされていく。福州の寺院數は、北宋中期が最も多く、南宋に入ると減少する、とあるのは、第一章でのべられたことがここでも確認されて興味深い。次に寺田について検討され、全墾田中に占める割合を算定し、また福建獨特の產錢の考察から、寺產の相對評價を定めて、宋代福建寺院の社會經濟上の地位を論ぜられる。僧寺の福建の財政に占める地位について、賦課の割合が高率で、民の保障となっていたとされる。また「實封」の實體についても究明され、住持決定の入札であるとされた。南宋朝による遺贖錢の徴収や、地方官による土木・福祉事業の僧徒と寺院に對する委贖の事業についても、次々に明らかにされていく。ここで教團使役の意圖は、寺產の豊かさもあることながら、官場の陋風・胥吏の不正と非能率にあったとされるのは、特に注目される指摘であろう。著者はこの章の結論の一部で、宋代に福建地方が「佛國」と呼ばれていたのは、教風や禪風の隆盛というよりは、各地に林立する寺院のおびただしさと、豊かな寺產による、といわれているが、このことは、閩僧は多く行脚せず、割りの良い住持職の地位のために、官邊にコネクションを求めていた<sup>(10)</sup>ということなどがあることから傍證

される。

第五章は、「喫菜事魔」は、從來の研究がマニ教徒であるという前提に立って論をすすめているが、果してそれでよいのかという疑問から出發される。五代から明までの諸史料をたどり、福建・泉州・温州・台州への流轉を明らかにされる。元代の、明州慈谿縣の摩尼の香火を奉じてきた道院と、摩尼佛を具體的に示された寫眞は興味深い。次に宣和三年（一一二一）制定の「事魔の條法」をめぐる、その取締りと影響について論ぜられ、この禁令の故に、すなわち「喫菜」して肉食せず精進することを禁ずる條項が加わることによって、これが妖教檢舉のもっとも重要な根據となったことを論證される。魔教發生の地は、浙東や江東の山間地帯で、肉食できず蔬菜を喫するのみで、魔教と關係のない民衆を拘繫する場合もあったことを明らかにされていく。白雲宗や白蓮宗との關係などから喫菜事魔というのは、邪教一般を包含し、誹謗の語であって、邪教の摘發にあたる官憲側が用いた稱呼で、必ずしも祕密宗教のみを指すものではなかったことを結論づけられる。本章は、次章の内容とも深く關係する。

第六章は、著者が本論の末尾の「補」でいわれるように、方臘は、マニ教徒なりとする説が中國でも日本でも自明のこととして行われてきたことに對して、既出史料を見直すべきこと、關連史料の發掘に努力すべきことの必要を提唱する意圖をもって書かれたものである。この中で著者は、方臘の亂の基本史料である「青溪寇軌」について、はじめて根本的疑義を提起された。著者は、「青溪寇軌」は、方勺の『泊宅編』、缺名の『容齋逸史』、莊綽の『雞肋編』の中から、方臘關係を録出したもので、『泊宅編』には、三卷本と十卷

本があり、三卷本は、後人の臆改が加えられており、十卷本に従うべきであるとされる。三卷本は、方臘を喫菜事魔とみなし、方臘がマニ教徒であったとする證據になるが、十卷本は斷定していない、とする。方臘のアピールが記載されている『容齋逸史』のこの部分は、後代の人が野史に基づいて新たに選述したものと考證されている。方臘の亂と宗教の關係について、從來マニ教をこれに當てる説がいわば通説となっていたが、このことに關して著者は、疑問を提出された。すなわち資料には方臘自身が事魔の徒であったとは述べられておらず、この亂に呼應して事魔の徒が各地で蜂起したことをしるすにすぎない、とされる。著者の舊稿について、丹喬二氏の反論<sup>(5)</sup>があつて、「竺沙氏の主張とは逆に、喫菜事魔も方臘の亂もマニ教である」という結論を出されているが、竺沙氏は、喫菜事魔の一部について、また方臘の周邊についてマニ教を否定しておられる譯ではなく、むしろ氏は、部分から逆に全體の結論を引き出すことの誤りについて論じ、方臘の亂の性格を究明されていると思う。

次に方臘の部將洪載の一隊がつけた鉢卷の上の鏡は、マニ教徒であることを證明するものでなく、「業鏡」であるとして、佛教との關係を考證される。さらに宋の太宗の帝位繼承（一種の小革命）に關連する「寶誌譏記」について、方臘が蜂起するときに掲げたことから、方臘の革命的要素は、むしろここにあるとされたことは、はじめての注目すべき指摘であらう。最後にこの亂の社會的背景について論ぜられ、睦州（嚴州）は、無産税戸の比率が61%で群を抜いて高く、雇傭労働者が茶園・漆園・農耕・養蠶等で細々と生計を立てており、方臘自身がその一人であつた可能性があつたとされる。

このことに關しては、中國に新史料の紹介があり、著者の指摘にそつて、再考する必要性ができたといえよう。また著者の意圖した方向の論文が續々と發表され、本章の研究史上の位置が明らかにされつつあることは、著者の當初の論考の目的がここに達せられたとみられよう。

第七章では、主として『吳興金石記』の道民に關する資料によつて、南宋から元に及ぶ浙西地方の「道民」について論じられる。道民は、廣範な組織をもち寄居形勢戸に庇護された重寶な技術集團であつたという。彼らは浙西のクリーク地帯に石造りの橋が架設されるようになったので、そこに活躍する場が生じたという。

第一章で著者がのべられるごとく、度牒との關係で僧尼になるのは、全く狹き門であつた。道民というのは、度牒を買得した僧でも係帳の童行・行者でもなく、さりとて一般の俗人とも異なるいわゆる白衣道者に他ならなかつたとされる。道民は、喫菜事魔の烙印を押されたこともあり、また白雲宗を含むものであつたことを論證される。この時代に眞に信仰に生き、社會に貢獻したのはこの人々でなかつたかといわれる著者のことばは、宋代宗教史上極めて重みをもつことばと思われる。今後の宋代宗教史研究の方向に大きな示唆を與えるものとして受けとめたい。

第八章は、從來の白雲宗の研究にない異民族の元朝支配という政治的・社會的背景のもとに追求された論考である。先ず本章では、征服王朝である元が、まだ江南の事情にうというちに、白雲宗は公認の教團となつて教線が擴大されていき、一方、禪宗がフビライの江南佛教統御の標的となつて苦惱するようすが、鮮かにクローズアップされて、論述されていく。白雲宗は、湖州路・嘉興路（浙西地

方)の豪民そのものの教團であったことが指摘され、僧人が兩税を免除されていたから、大地主たちは、白雲宗の僧となることで免税をはかった、とされる。以上の論證は、従来の見解、たとえば小川貫次氏の「農民に支持された教團」とする見解にとどまっていたものを、さらに一步踏みこんで明らかにされたものである。

白雲宗の彈壓が、大徳年間に行われた背景を、世祖から成宗への江南佛教政策の轉換に關連づけ、同じ時期に起った海賊朱清・張瑄の籍沒事件は、實は白雲宗彈壓と同じ大富豪集團の同時摘發であって、同根のものと推論される。白雲宗は、度重なる彈壓にもかかわらず、教團そのものは解體せず、元末まで連綿として存続したが、明初以來まったく姿を消してしまったのは、洪武帝による浙西富民抑壓策、就中鳳陽等への徙民政策によるとされた。白雲宗が白蓮宗等と性格を異にすることを解明した注目すべき論考といえよう。

後編第一章は、敦煌二百年の僧官制度の變遷を明らかにしている。なお後編全體の論考について共通していることではあるが、स्टاین宛集文獻、ベリオ本、北京本のマイクロフィルムなどの資料を使われ、また渡英して、ロンドンにて原資料を見られるなどの可能な限りの詳細な調査を重ねられている。

先ず洪審(辯)以下歸義軍時代(八五一―九六〇)の都僧統について、一人一人を精密に検討し、『歸義軍歴代都副僧統表』を作成されている。このことによつて、都僧統・副僧統の僧名と俗名、在位順序が明らかにされた。なお敦煌都副僧統の性格から、敦煌教團の安定した状況と長安佛教のもっていた鎮護國家的性格が、ここにはじめて我々に知らされたのである。

次に「教授」について検討され、都教授は都僧統に充當でき、吐

蕃時代のみにあつた稱號で、僧界の代表者であつたとみる。このことと關連して、朔方管内教授大徳は、臨壇大徳に類する法位で、敦煌の教授に近いという、従来の研究と異なる新しい見方をとられる。チベット語の *mhan po* の考證によつて、教授のチベット起源をも探索されている。「都僧錄」については、僧統の次官という中國には見られない特殊な存在であつたことを明らかにされ、「僧政」と「法律」の階級や職掌についても分析される。結局、法律↓僧政↓都僧政↓都僧錄↓副僧統↓都僧統となることを論證された。従来の僧官研究で言及されることのなかつた判官についてのべられ、宋代の僧判官の源流と想定された。なお敦煌獨自の「寺卿」について、彼らは全くの俗人で寺の經營や寺戸の監督に當つてゐることを示された。

最後に僧官制度を四期に區分し、吐蕃占領前期、同後期、歸義軍張氏時期、同曹氏時期に分け、塚本善隆博士の所論によりつつ敦煌二百年の佛教の動靜をのべられ、四期を盛唐長安佛教持續期、チベット佛教受容期、晚唐佛教受容期、守成期に分類されている。

以上の論考で、特に敦煌文書に頻繁にでてくる實權を伴ふ濫設された職種であると見做され、寺職と變らないものと從來規定されていた僧官を、敦煌教團の統制機關を構成する僧官であることをはじめに見出した意義は大きい。

第二章では、先ず敦煌文書ベリオ本 2387 の資料を「敦煌寺院常住擁護宣言」とする仁井田陞氏の説を妥當とし、何故この時かかる宣言を作成しなければならなかつたかについて、吐蕃期の敦煌の寺戸を中心に、その歴史的意義を探究される。寺院と寺戸の實態を示す資料として、स्टاین文書 6524v 「諸寺丁壯車牛役簿」二百行





た。最後に特異な資料として、顯徳五年二月國保文書（大谷文書二八三八號）をあげられる。社官が縣廳に呼び出され、懲罰をうけている等、他の多くの社とは性格を全く異にすると思われ、今後の検討に資するとして結ばれる。

著者の明らかにされた敦煌の社は、サークル的な社であるとともに、街区にあった社としての地縁的性格を一部もっていたと見られる。より郊外では、すなわち村落には、全くの地縁的な社があつて、これらに關係する文書が混在していたのではあるまいか。

以上本章で著者が明らかにされた社の内容は、從來知られた断片的な知識にくらべて、最も詳しい壓倒的な量と、生々しい實體をはじめて我々に知らしめてくれた劃期的論考である。中國内地の社の研究に裨益するところ測り知れないものがあるといえよう。

本書は全て嚴密な考證と既述のごとく整然たる論證によつて構成されており、筆者の淺學によつて曲解するところが多かつたことを惧れる。紙數の關係もあつて、部分的な紹介に終つたところもかなりあり、そして何よりも精緻な論證の筋道を的確に紹介できず、結論のみ記してしまつたことについて筆者の御寛恕を乞う次第である。各論考に關連する他論文、その他論文執筆時の批評に對し、懇切な行きとどいた紹介と配慮がなされていることを附記しておくたい。

- (1) 『新編分門標題皇朝箋要綱目』卷五十六。  
 (2) 『史林』54—2。  
 (3) 『後村先生大全集』卷八十九。

- (4) 同右、卷百八。  
 (5) 丹喬二「北宋の方臘の亂に關する基礎的考察」、『研究紀要』日本大學人文科學研究所。

一九八二年二月 京都 同朋舎

A 5 版 五八六頁

錢 穆著

朱子新學案

荒 木 見 悟

一

著者（一八九五年生）は、『先秦諸子繫年』『中國近三百年學術史』等の名著により、その學識を高く評價されている碩學であるが、朱子への關心は三十歳未滿の頃より芽生えたといひ、現在、『中國學術思想史論叢』(四)（臺灣、東大圖書有限公司刊）におさめられている「朱子心學略」「朱子學術述評」の兩論文は、本書よりも二十餘年前に執筆されたものであり、『宋元學案』を披閱したのち、それより更に二十年をさかのぼるようである（右論叢序）。

ところで右の兩論文において、著者が強調しようとした一點は、「朱子の心學に通じなければ、朱子學の全貌は分らないし、また朱陸異同の實態も分らない」（一三二—ページ）の語に端的に示されているように、朱子學を心學と規定し、而もそれは最も優秀な心學であると斷定するにある。その根據は、「朱子は心を外にして、性を